



The moon on the ruined castle [Rentaro Taki]
A coconut from southern island [Tetsuji Onokubo]
Red dragonfly [Koboku Yamada]



Song of pack-borse man in Komoro of Nagano [Japanese folk song]
Cam rebuffal [Ryutaro Hirota]
Snowy town [Yoshinao Nakada]



Early spring song [Akira Nakada]
The rain on Jogashima [Tadashi Yano]
Spring sea [Michiohime]



Solitude in the night [Tadatsuke Ohno]
The road [Koboku Yamada]
Song of the sea shore [Tametsu Nariai]



THE FOUR SEASONS IN JAPAN



I MUSICI
HEINZ HOLLIGER

CLASSIC
銘盤
BEST 1200

日本の四季

今は亡き大指揮者トスカニーニが、「世界最高の室内アンサンブル！」と激賞したイタリアの誇るイ・ムジチ合奏団は、1951年に、ローマのサンタ・チェチーリア音楽院の12名の卒業生たちによって組織されたもので、1963年に初来日して以来、1991年までに14回もわが国を訪れている。

そのためか、イ・ムジチ合奏団のメンバーは、日本が大変お気に入り、彼らの好きな〈春の海〉や〈荒城の月〉といった、日本の愛唱歌をもととした“日本のメロディ集”のレコードを作りたいと、かねてから希望していた。それが今回、フィリップス・クラシックスと日本フォノグラム（現・ポリグラム）との共同制作で実現した。

イ・ムジチ合奏団といえば、ヴィヴァルディの協奏曲集《四季》のディスクが、日本人たちに愛聴されているが、このディスクは、それにあやかっただけ、それぞれの季節に合った曲を、3曲ずつ4つのグループに分け、「日本の四季」と題した、素晴らしいアイデアのものである。また、この演奏にスイスの生んだ世界最高のオーボエ奏者、ハインツ・ホ

リガーが加わっているというのも、錦上華を添えたといつてよいだろう。

編曲者の藤掛廣幸は、1977年に、エリーザベト王妃国際コンクールで見事優勝した作曲家で、代表作に《縄文譜》がある。イ・ムジチ合奏団の弦の美しさと、ホリガーの清澄なオーボエの響きと、バロック調の編曲がそれぞれの曲を引き立てている。これは、一家団欒で楽しむことのできるディスクだ。

「春」

早春賦(中田章)

暦の上での立春は、冬がまだ本番中の寒いさなかにやって来る。それから本当の春が到来するまでの間は、実に待ち遠しいものである。「春は名のみの風の寒さや 谷の鶯 歌は思えど 時にあらずと 声も立てず……」という歌詞から始まるこの〈早春賦〉はそうした春を待つ人々の心の動きを描いた歌で、大正2年に作曲されている。作詞者の吉丸一昌は東京音楽学校の教授をつとめた国文学者で、この歌のほか、〈木の葉〉や〈故郷を離るる歌〉などの童謡や唱歌を書き残している。また作曲の中田章も東京音楽学校の教授で、オルガ

ン奏者としても知られていた人である。ここでは、ヴィヴァルディの《四季》の一部を連想させる巧みな編曲が素敵だ。

城ヶ島の雨(梁田貞)

1913年(大正2年)、島村抱月の主催する芸術座音楽会で発表され、梁田貞の名を一躍有名にした出世作で、日本を代表する名歌曲のひとつとして親しまれている。「雨はふるふる城ヶ島の磯に 利休鼠の 雨がふる」で始まるこの歌の作詞者は、水郷として有名な九州の柳川に生まれた北原白秋で、白秋はこの当時、城ヶ島に近い神奈川県三浦半島の三崎に住んでいて、この詩を書いたのだった。歌詞の中にある「利休鼠」というのは、緑色を帯びた灰色のいくぶん茶がかかったものを指し、茶人の千利休が好んだ色だといわれている。雨に煙る城ヶ島の光景が目には浮かぶような歌である。この編曲では、主旋律がオーボエで演奏されている。

春の海(宮城道雄)

俳人と謝蕪村の句に、「春の海 ひねもすのたり のたりかな」という、あまりにも有名な句

がある。邦楽の宮城道雄が尺八と箏のために作曲したこの〈春の海〉は、まさにそうした光景を念頭に置いて作られた音楽である。作曲されたのは昭和4年で、その年の暮れに、吉田春風の尺八と作曲家自身の箏で初演されている。宮城道雄は、瀬戸内海を舟で渡った時にこの曲を着想したといわれ、この曲には、静かな波の音や飛んで行く鳥の声、櫓の音などが描かれていて、全体は緩—急—緩の3つの部分からできている。クラシックの演奏家によって演奏される時は、ヴァイオリンやフルートがよく使われるが、ここではオーボエと弦楽合奏の形で演奏され、見事な効果をあげている。

「夏」

宵待草(多忠亮)

「待てど 暮らせど こぬひとを 宵待草の やるせなさ こよいは月も 出ぬそうな」。大正から昭和初期にかけて大変に人気のあった挿絵画家の竹久夢二の詩に、大正時代に活躍したヴァイオリニストの多忠亮が作曲したのがこの〈宵待草〉で、恋を知りそめた若者が、不安を抱きながら恋人を待ちつづけ

る、切ない心境をうたいあげた歌である。作曲されたのは大正7年で、詩も曲も、当時としては、大変斬新な感覚にみちあふれていたため、たちまちヒットし、広く愛唱された。ヴァイオリンの前奏に続いてオーボエ・ダモエで奏されるその旋律は、まことに美しく、この歌にぴったりである。

この道(山田耕筈)

「この道はいつか来た道 ああそうだよ
アカシヤの花が咲いている……」。詩人北原白秋の詩で知られる名曲である。北原白秋が北海道の札幌を訪れた時の印象をもととして書かれた詩だけあって、アカシヤの花とか白い時計台といった、札幌のイメージを強く感じさせる風物がうたい込まれている。山田耕筈がこの詩に作曲したのは、昭和2年のことで、そのしっとりとした味わいにみちた旋律は、まことに美しく、〈からたちの花〉や〈赤とんぼ〉と共に、広く愛唱されている。

浜辺の歌(成田為三)

わたしは海が好きで、海を見ていると、自然に心が和んでくる。浜辺に立って海を見て

いる時、よく浮かんでくるのが、この〈浜辺の歌〉の旋律である。舟歌風のリズムによるこの歌の、流れるような美しい旋律は、わたしたち日本人の心の琴線に強く触れるものを持っている。作曲者の成田為三は、日本の芸術的童謡の草分け的存在で、山田耕筈の下で作曲を学び始めたばかりの1918年(大正7年)に、林古溪の詩によるこの〈浜辺の歌〉を作曲し、一躍名をあげたのだった。成田為三は、この歌のほかに、数多くの歌曲や童謡を作曲しており、そのなかでは〈かなりや〉が広く知られている。

「秋」

荒城の月(滝廉太郎)

俳人の松尾芭蕉が、「夏草や つわものどもが 夢の跡」とよんだように、日本各地に残る古城址に立って往時をしのぶと、ひとしお深く感慨が胸に迫ってくる。この〈荒城の月〉は、日本のクラシック音楽の黎明期に活躍し、若くして世を去った滝廉太郎が、まだ19歳の1898年(明治31年)に、詩人土井晩翠の詩に作曲したもので、荒れ果てた古城に寄せて、世の栄枯盛衰のさまがうたいあげられている。

オーボエによって切々と奏される、この歌の哀調を帯びた旋律は、強く聴き手の心を打つ。〈花〉と共に、これは滝廉太郎の代表的な歌曲のひとつである。

やしの実(大中寅二)

わたしは旅行をすると、できるだけ海岸に近い宿をとることにしている。浜辺を歩いていると、時々、思いがけないものが打ち寄せられているのに驚くことがある。この〈やしの実〉は、民俗学者で作家の柳田國男が、愛知県の渥美半島先端の伊良湖岬の浜で、そこに打ち上げられていたやしの実を見て感動し、その時の印象を文豪島崎藤村に語り、藤村がその話をもとに書きあげた詩に、大中寅二が作曲したものである。昭和11年に日本放送協会の国民歌謡として発表され、全国的に愛唱されるようになった。詩の内容は、遠くの島からはるばると海流に運ばれて辿り着いたやしの実を手に取り、自分の故郷を思い、流浪を続ける自分の身の上を思うというもので、その旋律は、どこか憂いを帯びていて淋しく、心を打たれる。ここでは、主旋律はオーボエで演奏されている。

赤とんぼ(山田耕筈)

都会では、最近、あまり赤とんぼを見かけなくなったが、夕焼け空に、あたかも赤い夕陽に染まったかのように、群をなして飛んでいる赤とんぼは、秋の重要な風物詩のひとつといってよからう。山田耕筈が三木露風の詩に曲をつけたこの〈赤とんぼ〉は、子守娘に背負われて赤とんぼを見た、幼い頃の追憶を切なくうたいあげたもので、その美しい旋律は日本古来の五音音階で作られており、〈からたちの花〉や〈この道〉、〈待ちぼうけ〉、〈砂山〉などと共に広く愛唱されている。日本語の響きを大切にしていた、山田耕筈の作風がよく表れた代表的な歌曲である。

「冬」

小諸馬子唄(長野県民謡)

〈小諸馬子唄〉は、長野県地方に古くから伝わる民謡で、かつてこの地方の主要な交通機関であった馬を引く馬子たちによって歌われていたのがこの歌である。現在の軽井沢追分にいた宿場女が、碓氷峠の馬子唄をもとにして作ったと伝えられているもので、この歌はのちに新潟県や東北地方、北海道に伝えられ、

それぞれの地方独特の追分節を生んだ。北海道の民謡として有名な〈江差追分〉のルーツは、この〈小諸馬子唄〉にあるといわれている。ここでは、独特の小ぶしに富んだのどかな旋律が弦の合奏で演奏されている。

叱られて(弘田龍太郎)

「叱られて 叱られて

あの子は町まで お使いに

この子は坊やを ねんねしな

夕べさみしい 村はずれ

コンと狐が なきゃせぬか」

この〈叱られて〉は、童謡の〈靴が鳴る〉や〈雀の学校〉などで知られている詩人の清水かつらの詩に、弘田龍太郎が曲をつけたもので、大正9年に発表されている。コール・アングレで奏される、そのさみしげな旋律を聴くと、叱られた子供たちの悲しくて淋しい気持ちがしみじみと伝わってくる。作曲者の弘田龍太郎は、清水かつらと組んで数々の童謡の名作を生んだが、芸術歌曲の面でも、〈小諸なる古城のほとり〉のような、すぐれた作品を残している。

雪の降る町を(中田喜直)

尾瀬沼の風物をうたいあげた〈夏の思い出〉と共に、中田喜直の名前を有名にした名歌曲で、雪国の詩情をこれほど美しく描出した歌曲というのも珍しい。内村直也の詩に作曲され、1951年(昭和26年)に発表された。ここでは、雪の降りしきる光景を思わせる、細かい音型の弦とハーブシコードによる前奏から始まり、主旋律がオーボエやオーボエ・ダモールで奏されたあと、最後にはふたたび、弦とハーブシコードによる細かい音型の後奏で結ばれる。まことに雰囲気にあふれた、巧みな編曲だ。

志鳥栄八郎

© 1991

■ユニバーサル ミュージック ニュースレター会員登録中!

ユニバーサル ミュージック ニュースレターに登録(無料)すると最新のアーティスト・ジャンル別インフォメーションやスペシャルオファー等をメールで受け取ることができます。
※パソコン・スマートフォン・携帯(一部非対応有)どちらへの配信も対応しています。

詳しくはこちらから! <http://umusic.ly/umnews>



■ユニバーサル ミュージックのホーム・ページ

<http://www.universal-music.co.jp/>



※コンテンツによっては対応しない機種があります。また、傷、汚れ、破損、光の反射などによって読み取れない場合があります。

＜取り扱い上のご注意＞●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱って下さい。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。

＜保管上のご注意＞●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。●ディスクは使用后、元のケースに入れて保管して下さい。●プラスチックケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。